

はじめに

「人類の歴史は戦争の歴史」と言及されることは珍しくありません。実際に、戦争は人類に生じた様々な問題の解決手段（手段であって必ずしも解決に結びつくとは限らないことには留意する必要があります）として用いられ、また戦争は多くの技術革新を人類にもたらしました。これだけに限りませんが、戦争が人類にもたらした影響は、言うまでもなく計り知れません。

その一方で、私たちはどれほど戦争について「知っている」と言えるでしょうか？ 中学校の歴史の授業や、高等学校での日本史・世界史を問わず、戦争は必ずと言っていいほど扱われているにもかかわらず、その本質的な部分に触れる機会は、多いとは言えないかもしれません。とはいえ、これは戦争の本質的な部分は捉えづらいうということでもあり、そもそも戦争の持つ性質は極めて多面的であるのです。

戦争をはじめ、歴史における軍事を扱う学問は「軍事史」と呼ばれますが、一口に軍事史といっても戦争史、戦略史、戦術史、軍事技術史など、その包括する範疇は多岐にわたります。こと軍事史においては、「軍事」の観点に立つか、「歴史」の観点に立つかによって、同じ事象であっても論点や争点がかなりかけ離れていることも珍しくはありません。実際に、近代以降だけで見ても、軍事史は軍人（ないし軍事研究家）が扱うか、歴史家が扱うかによって、手法や論点、依拠する史資料の扱いに至るまで、まるで違う考察になることも往々

にして見られます。

しかし、これはもちろん、どちらが正しいあるいは誤っているということでは、決してありません。とはいえ、軍事史の研究は、どちらかの観点に寄りがちなものになり、かつ「軍事」や「歴史」という分野自体が、非常に多様な要素からなっています。こうして見ると、軍事史は歴史のなかでも、とりわけ多面的な観点が要求される分野であると言えます。戦争そのものが持つ多面的な性質に加え、軍事や歴史、さらにはそれに付随する様々な知識を、体系的にまとめ上げていく必要があるのです。

見方を変えれば、歴史が関わる分野において、これほど多様な側面を見せるものも珍しいかもしれません。一見すると極めて限定的に思えるものの、その内面では様々な観点を要求されるという性質が、軍事史の魅力と言えるでしょう。

本書は、こうした多面的な軍事史を学ぶうえでの、入門書として位置付けたものです。幅広い「軍事史」の概要を把握するため、「決戦」という主題を設定し、これを中心に解説を進めるものです。したがって、なるべく軍事と歴史のバランスを取りつつ、軍事史から歴史を新たに捉えなおすことを、第一の目的としています。この手法は歴史学に寄ったものであり、その意味では、「軍事という切り口から歴史を見直すか」といった点でも、お楽しみいただけたと思います。

また、本書のもう一つの特徴として、主題となる戦場や決戦は、あえて無名とされるものを多く採用しました。教科書や歴史書などに頻繁に登場するものだけが、歴史上で重要であったとは限りません。むしろ、場合によっては、その歴史的な価値が過大に評価されてきたも

のも少なくはないのです（例えば、732年のトゥール・ボワティエ間の戦い、1241年のワールシュタットの戦い、1571年のレパントの海戦など）。

この有名・無名を分けた原因は様々です。これは歴史寄りの観点になりますが、過去の事象には何かしら埋もれた要素があり、これにどのような価値を見出すかによって、評価が分かれることになるのです。究極的には、過去の事象に無駄や些末なものなどなく、どのような小さなものであっても、現在というこの時代を構成する礎になっているというのが、私の考えです。そうした試みも込めて、本書ではあえて「無名」とされる主題を多く取り上げることにしたのです。

何よりも、先述のように軍事史あるいは「軍事から見た歴史」には、独特の魅力があることもまた事実です。私が考えるに、その魅力の最たるものとは、「時代の特徴や変化を明敏に読み取れる」ことにあると思います。そうした考察を経て、改めて私たちは、戦争の本質に向き合うことができるのではないかと考えるのです。

本書では、「決戦」というメインの主題に加え、各パートごとに大まかなテーマを設定しています。

「第Ⅰ章 古代の戦場」では「^{せんめつ}殲滅と^{かくらん}攪乱」、 「第Ⅱ章 中世の戦場」では「技術革新」、 「第Ⅲ章 近世の戦場」では「火砲の登場と近世への過渡期」、 「第Ⅳ章 近代の戦場」では「軍事機構の近代化」、 「第Ⅴ章 現代の戦場」では「総力戦と次世代の戦争の可能性」です。これらのテーマを通じて、軍事史や歴史そのものに、読者のみなさんがあらためて何かしらを「発見」していただければ幸いです。